

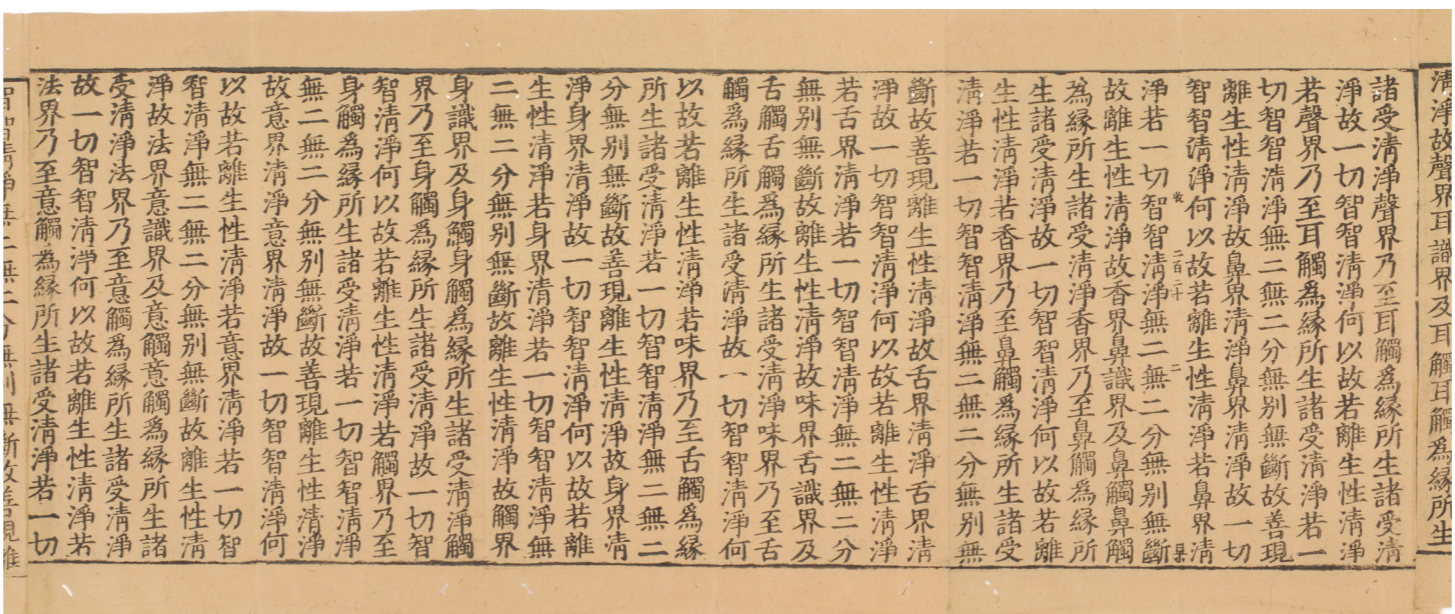
宋版一切経思溪版の版式転換

―紙六面から一紙五面へ―

佐々木 勇

去る二〇一四年九月二十五日から二十七日までの三日間、落合俊典先生のお取りはからいで、尾張高野山岩屋寺尊蔵宋版一切経思溪版の調査に参加させていただいた。岩屋寺御住職後藤泰真様はじめ岩屋寺総代・地域の皆様にご支援いただき、充実した原本調査を成すことができた。心中より御礼申しあげる。

この調査で、かねてより原本確認を希望していた思溪版の版式転換点を見ることができた。



岩屋寺蔵 思溪版『大般若波羅蜜多經』卷第二百二十 一紙六面

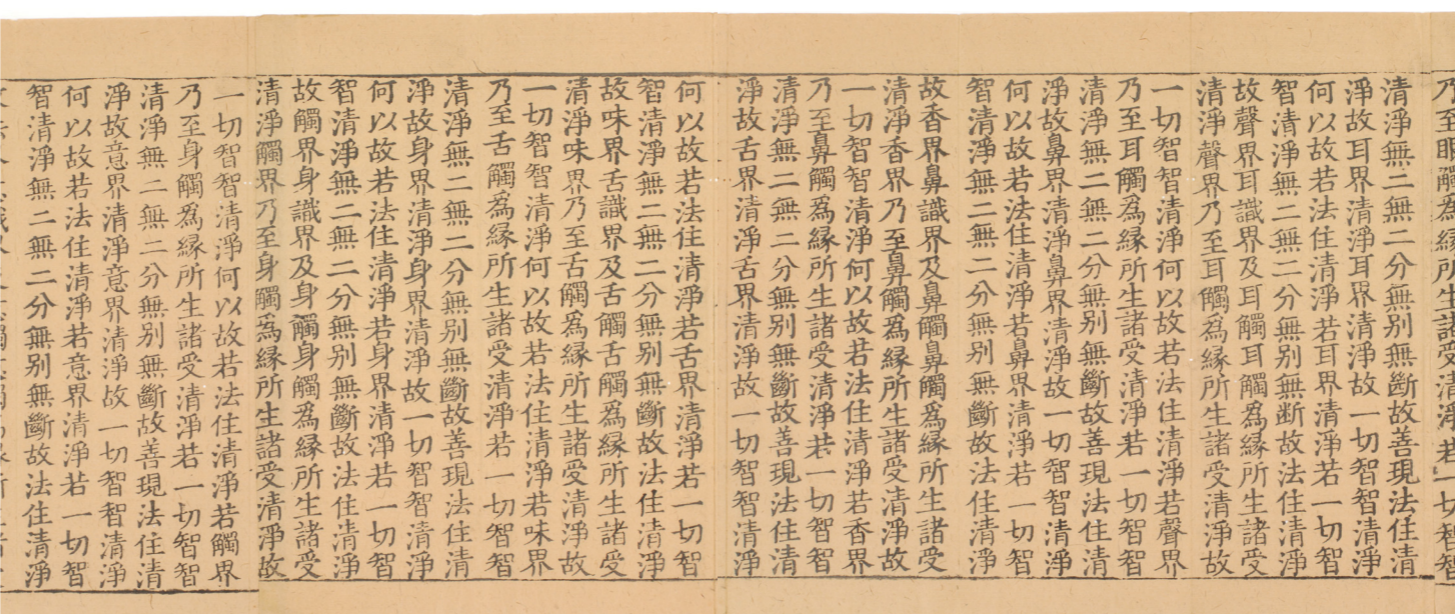
*紙継ぎ箇所を▲にて示す。

宋版一切経東禪寺版・開元寺版(福州版)は、一紙六面を基本とする。ところが、続く思溪版は、一紙五面となる。しかし、思溪版においても、第一帙千字文天より始まる『大般若波羅蜜多經』巻第一―巻第二百二十までは、一紙六面であることが報告されていた。岩屋寺蔵思溪版においても、左写真のごとく、従来の指摘の通りであった。

このように、思溪版において、福州版の版式を引き継ぐ方式から、一紙五面方式に変更したのは、なぜであろうか。この謎を解く鍵は、福州版と思溪版『大般若波羅蜜多經』巻第二百二十までに挿入された、五面の一紙が握っている。

本稿の筆者は、重要文化財醍醐寺蔵宋版一切経の悉皆調査に加わり、東禪寺版に親しく接する幸運に恵まれている。

醍醐寺蔵東禪寺版では、第237寸函『中論』巻第二―巻第四の三帖から、紙数の多い帖に、五面の一紙が挿入されている。その



岩屋寺蔵 思溪版『大般若波羅蜜多經』卷第二百二十一 一紙五面

この注記は、すでに刊行されている目録類、「共同研究―本源寺蔵宋版一切経調査報告―」(同朋学園佛教文化研究所紀要)創刊号、一九七九年三月)や『神奈川県立金沢文庫保管 宋版一切経目録』(一九九八年三月、神奈川県立金沢文庫)の「刻施」備考」項目にも見られ、本源寺蔵本の記文は、口絵写真でも確認できる。それらは、醍醐寺蔵本の刻記と一致し、醍醐寺蔵本のそれに含まれる。

また、東寺蔵宋版一切経東禪寺版『中論』巻第二にも、醍醐寺蔵本と同じ位置(第十二板第五面一行目下空白)に、醍醐寺蔵本と同文の注記が存することを、原本で確認済みである。

醍醐寺蔵東禪寺版における「此帙除六行要粘策二邊不厚薄」等の記文を、同文をまとめて掲げれば、左の a-g となる。

- a 此帙除六行媿得粘縫兩邊無厚薄
- b 除六行要粘策二邊不厚薄
- c 此帙除六行要粘策二邊不厚薄
- d 除此六行要粘策二邊不厚薄
- e 此帙除六行要粘冊二邊不厚薄
- f 除六行要粘策二邊無厚薄
- g 除六行要粘策二邊

右「此帙除六行」の注記は、一紙五面の紙にのみ存した。よって、「此帙除六行」除六行「除六行」は、一紙(板三十六行(每半折六行六面)である東禪寺版の六行を除し、一紙三十行とすることである。すなわち、右の記文は、その一紙の六行一面を取り去り、五面とすることの断わり書きである。

全文同主旨と考えられるため、最多例が見られた b「除六行要粘策二邊不厚薄」を解釈する。a の「得」に対応する「要」は、補助動詞であろう。「粘」は、a の「粘縫」に相当する。「紙を貼り継ぐ」ことであろう。「策」は e「冊」と同意で、帖装(経摺装)の一冊のことと解釈される。そうであれば、「二邊」は、帖の長辺左右の二邊であろう。「不厚薄」は、「厚薄」を作らないことであろう。

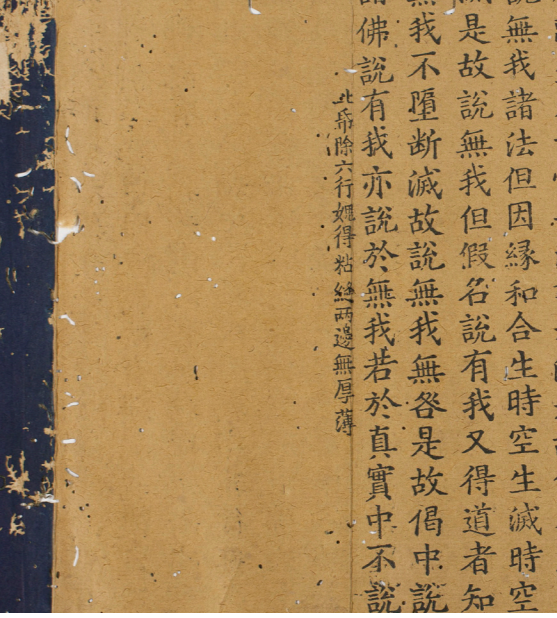
したがって、「除六行要粘策二邊不厚薄」は、「多くの紙を貼り合わせたこの一冊に、紙継ぎによる左右二邊の厚みの差が生じないように、この紙の六行一面を除く」意、と解釈できる。

全紙を六面とし、それを貼り合わせて折り、帖装とすれば、紙継ぎ位置は必ず右邊になる。そのため、紙数の多い帖では、右邊が左邊より厚くなる。これを避けるため、帖の中間に五面の一紙を挿入し、以降の紙継ぎを左邊に移動させた。一面六行を誤脱したものではない、とこの注記は

中で、題記の年月が最も早いのは、巻第四の「元祐九年(一〇九四)正月 日」である(巻第二第三は、翌月「元祐九年二月 日」題記)。その『中論』巻第四は、第十三板を五面とする。この第十三紙以外は六面で、全二十三板である。以下、元祐九年以降刊刻の十八板を超える帖では、五面の一紙を挿入することが原則となる。すでに指摘される通り、五面の一紙は、一帖の中間に挟まれる。

この東禪寺版における五面の一紙に、右の問いの解を導く一文が刻されていた。

第237寸函『中論』巻第二の第十二板には、第五面一行目下空白に、「此帙除六行媿得粘縫兩邊無厚薄」の一行を刻す。



醍醐寺蔵 東禪寺版『中論』巻第二 第十二板

(全体の写真は、二〇一五年三月刊行予定の目録影印篇に掲載される。)

第十二板は、経本文は五面であり、第六面は、空白である。この第十二板に続けて裏表紙を貼り、続く第十三板から裏面に印刷する。全二十三板である。

続く『中論』巻第三は、全二十四板で、やはり、第十三板の経文を五面までとし、元祐の第六面右端に、同一の刻文を記す。以下、醍醐寺蔵東禪寺版全体で、五面の一紙に限り、二十三の類例を見出せる。

一帖のみであれば、紙継ぎによる両辺の厚さの差は微々たるものである。しかし、一帙十帖と首釋帖を積み上げた時、左右両辺の厚さの差は、放置できないものとなったのであろう。

右の問題を、すべての紙を五面とすることで解決したのが、『大般若波羅蜜多經』巻第二百二十一以降の思溪版である。

ただし、思溪版でも、千字文118伏・119戒・120羌函などに、福州版と同じく一紙六面で、第一面と第二面との間に柱刻が有る帖が存することを、上杉智英氏から調査時にお教えいただいた。「華嚴經(六十卷本)も同様であった。これらの函の經典は、長谷寺蔵思溪版においても一紙六面で、「異版」とされている。

なお、一紙六面が基本であった福州版と思溪版開始部分とは、第一面と第二面との間に置いていた「寸 參卷拾參 吳宗刀」などの柱刻を、五面一紙の次紙から、第二面と第三面との間に移動させている。この工夫が、思溪版の柱刻を紙継ぎ位置に隠すことに繋がる、と筆者は推定している。詳しくは、拙稿「宋版一切経東禪寺版に五面の一紙が挿入された理由」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部63号、二〇一四年十二月)を、御覧願いたい。

- 【参考文献】
- ・奈良県大般若経調査報告書 一本文篇(同) 資料篇1
- ・牧野和夫「關於宋版大藏經中」一版五葉三十行 版片的考察」
- ・同右「高野山金剛峯寺蔵『四分律蔵』(宋版大藏經ノ内)について」
- ・「かがみ」第四十二号、二〇一二年三月
- ・「豊山長谷寺拾遺 第四輯之一 宋版一切経」(二〇一一年)

醍醐寺御当局に、甚深の謝意を表します。

(広島大学大学院教育学研究科教授)